

# 作業船船長 江川幸治

土砂や資材などを運ぶ「運搬船」、海底に堆積した土砂を浚う「浚渫船」、海底の地盤改良などに使われる「地盤改良船」……。海に囲まれた日本では各地で海洋開発が行われており、こうした作業船が活躍している。その作業船の運航・操船全般に精通するスペシャリストが、作業船船長だ。

## 五島列島に生まれ育った船乗り

作業船船長・江川幸治は、一九六六（昭和四十二）年、長崎の五島列島に生まれた。海に囲まれて育ち、自然な成りゆきで海の仕事に就いた。「高校生のころは学校に行く前に定置網のアルバイトをしていたし、周囲にも作業船の乗組員や漁師になった人が多いんです。私も高校を出て一年くらいは車関係の仕事をしました。が、すぐにやめて二〇歳のころから船に乗っています」

江川が扱う作業船は、浚渫船や地盤改良船などがメイン。浚渫船は海底に積もった土砂を取り除き、港に出入りする船の航路や泊地の水深を保つための作業船。地盤改良船は軟弱な海底地

盤にセメントスラリーを流し込んで軟弱地盤の土砂と一緒に攪拌して杭を作り、数百本を一ブロックとして強固な基礎地盤を作る機能を持つ。

「船に乗ってすぐ、先輩に後ろに立って操船を教わりました。教わったといっても、昔の職人さんみたいな感じで、先輩の仕事を見てから自分で実践して……。ポンプ式浚渫船だったら、ラダーを下げて海底の土砂を掘って、ポンプで吸い上げる。特殊な船だからなかなか覚えられないけど、とにかく経験するしかない」

「作業船で施工する際の運転には特に資格は要りませんが、揚錨船の操船には、海技免状（航海・機関）や移動式クレーンの資格は必要ですね」

## 作業船を動かす三つの職種

作業船の仕事には、大きく分けて「甲板職」「機関職」「電気職」の三職があり、甲板職は船全体のオペレートや保守点検・整備を担当する。この三職の作業全体を監督することが船長の役目だ。船長には経験を積んだ甲板職が就くが、最低でも二〇年はかかるという。

# KEEP

守り、伝えること

「修理や整備を少しでも早く終わらせて、一秒でも長く運転する。その姿勢は不変」



左/江川が船長を務める深層混合処理船・ボコム12号。  
中/長さ51m以上の改良軸の先に掘削翼が取り付けられており、そこからセメント固化剤を吐出する。船の位置調整にはGPSを用いるため、改良の精度も高い。  
右/左から、五洋建設・嶋尚幸職員、江川、五洋建設・永野完児工事所長、飯塚正実職員。  
「江川船長には船のことを色々と教えてもらっています」と入社2年目の飯塚職員は話す。





現場のプロフェッショナル  
KEEP & CHANGE

「甲板職は船自体の操作はもちろん、修理や整備も覚えなければなりません。みんな自分たちでやりますから。ほかには回航準備時のアンカーの起こしワイヤー格納作業などの『外回り』の仕事も大事。船長は作業全体の管理をし

ますが、甲板職の一人でもあるので、若い人と一緒にワイヤーを引っ張っていますよ」  
「気象の影響を大きく受けるのも海の工事の特徴です。たとえば、船を止めるためのアンカー作業は施工を始めるために手早くやらなければ

ばなりません。自分が入ったところは一秒でも早く準備を終えようと、海が時化（しげ）ようが風が吹こうが、アンカー作業に出ました。そこを海に落ちそうになりながら…。今は安全第一ですからそんな無茶はしません」

「泣きたくなった」海外での仕事

「最初に乗ったのは浚渫船で、そのあとは地盤改良船も含めていろいろ。行先は国内なら北は北海道から南は鹿児島まで、海外にも東南アジアを中心にあちこち行きましたね」  
一度海外の現場に行けば、最低でも半年、長ければ一年は帰れない。日本人の甲板職は船長を含めて三人ということがほとんどという。

「操船の勉強をするなら、海外に行った方が身になるでしょうね。朝から夕方まで一人で運転したりしますから。船長がいるといっても全部自分一人の判断で、責任感が違う。交代で仮眠する夜勤では、甲板職が一人になるので誰も助けてくれない。泣きたくなるけど（笑）、技術を学ぶには海外で覚える方が早いですね」

原則として作業員は全員が現地人。仮にインドネシアならインドネシア語を覚えて指示しなければならぬ。

「言葉だけじゃ伝わらないときは紙に絵を描いたりジェスチャーしたり…まあ大変でしたね」



左/「昔は見よう見まねだったけど、今は先輩が後ろに立って教えます。ボタンの一つ一つ、作業内容も解説付きで」  
右/高精度の施工には、船体の安定も不可欠。風・波・潮を把握しつつ、ワイヤー操作によって打設位置を決めるのも甲板職の重要な仕事だ。

「結果が見えない」海の中の仕事への信頼

現在、江川が従事しているのは、東京湾埋立工事の現場での地盤改良。CDM船という作業船で軟弱な海底地盤にセメントスラリーを流し込み、杭を造成し、埋立用地の護岸を築く基礎部分を築造している。現場を統括する五洋建設（株）の永野完児工事所長は、「作業はすべて海の中で行われているから、結果は目には見えませんが、江川船長のこれまでの経験と人柄を踏まえれば、何の心配もありません」と高い信頼を強調する。

「海の底は結果が見えないので、実感はわきづらい。われわれはとにかく預かった船を大事にしながらか、杭の一本一本を品質よく施工するだけです」



えがわ ゆきはる ●1966(昭和41)年、長崎県生まれ。高校卒業後、自動車部品製造工を経て、浚渫・埋立・港湾土木などを主業とする五栄土木株式会社に入社。作業船甲板職として国内外で経験を積み、「羽田D滑走路」をはじめ数多くの埋立・護岸工事などを手がける。

CHANGE  
応じ、変えること

「結果が見えない、わからない世界。だからこそ、杭一本を大事に施工する」